『こころ』K と先生の死の真相

Junko Higasa

夏目漱石作『こころ』「先生と遺書」五十三章末尾に描かれた先生の思い。『K は正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向かって見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、――それでもまだ不充分でした。私はしまいに K が私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなかろうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私も K の歩いた路を、K と同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横過り始めたからです』

これは、先生が「私」によって K の死の真相に気付かされたということである。先生の中から生きた物を掴み取ろうとする「私」の真面目に対して、先生はついに自分の過去を話す決意をした。それができたのは、新時代の青年の「私」に、明治の精神である「男同士の友愛」を見たからである。しかし先生は失望する。あれほど真摯に願いながら、先生の「話したい」という決断の信号に気付かなかった「私」に。そのとき先生は K の死の真相も自分と同じではなかったかと疑い始める。

「男同士の友愛に対する裏切り」に遭った K と「同じ現象に向かって見ると」、K の死は「失恋」が原因と容易く断定できないように思われてきた。尊ぶべき信愛の「現実と理想の衝突」それでもまだ不充分だった。先生はしまいに、尊敬さえ覚えた「私」の心の中に存在すらしない自分に淋しさを感じる中で、K もまた唯一親友と信じた「先生」の心の中から切り離された自分に淋しさを感じて、急に所決したのではなかろうかと疑い出した。そうしてゾッとする。自分も K と同じように、その淋しさのために急に死を選ぶのではないだろうかという予感が心を横切り始めたからだ。

先生は、「私」の事情を考えなかった自分を反省しながらも、「私」が尊い男同士の約束を思い出さなかったことへの淋しさから、ついに死を決意した。そうして「私」宛ての遺書に、明治の「男の精神」が「私」に分らないとしたら、それは時代や個性の相違であろうと書いた。しかしそれだけではない。なぜ自分が死ぬのか、それがなぜ「明治の精神」に殉ずることになるのかの意味を、先生は―漱石は―文字表記に込めたのである。遺書の中の「私」に対する呼びかけを「あなた」と「貴方」に分けて。

先生が「私」に対して「あなた」と書く時、それは「生活に困らないのに地位を得たいと望む」「自然に若い女に好奇心を抱く」金と恋に注意すべき「私」に向かって話しかけている。そして「貴方」と書く時、「真面目に人生そのものから教訓を得ようとした」「男」としての「私」に向かって話しかけているのである。先生にとって「過去を話す」という男同士の約束を果たさないのは厭な心持である。しかし男の友愛を忘れた「あなた」に会って話す機会を失った以上、真の「男」のために使う「尊い時間を惜しむ意味で書きたいことも省かなければならない」それでも先生は、大学の制帽の価値を「笑うだろう」時代の「私」に対して、かつてその「私」と同様に男らしくなかった自分を解らせるように書いたつもりである。そこに気付いて『私の鼓動が停まった時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です』(2015.3.13)